

西
鶴
物

日本永代花
常朝櫻陰以子

西鶴物語

いてふ本校訂者

沼波瓊音

山田美妙

杉谷代水

泉斜汀

山内素行

石村貞吉

山田三子

所金藏

村上靜人

郷白巖

川添文子

昭和十年八月九日印刷
昭和十年八月十四日發行

いてふ本
西鶴

定價
金六拾錢

編輯者

三教書院編輯部

代表者 鈴木種次郎

發行者

東京市中野區高根町六番地
鈴木種次郎

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社

發行所

東京市中野區高根町六番地

三教書院

營業所

電話 東京市中野區四一〇番
振替 東京市神田區錦町一ノ五番
電話 東京市神田區錦町二四〇八番

解題

「あゝ西鶴か」など、輕々しく友達みたいに西鶴を語る者は、未だ西鶴を知り得ざる者である。西鶴を讀んで其の文の妖艶のみを讚嘆する輩は、これ亦眞に西鶴を知つた輩で無い。西鶴を目して亂俗の文を作す者としたる徒は、昔もあつた。今もある。この徒に至つて、西鶴を解し得ざるに留まらず、文藝を知らず、人間を知らず、抑、眞其者をも知らざる、最も憐れなる徒である。西鶴は過去の日本に於て、最も完全に、最も美しく、肉の人間を寫した大才である。寫す所は多く、脂粉の氣、霧の如く日月を籠むる世界である。百華の間に身を没し、其の艷彩芳薫に酔うて死なむとする蛺蝶の情緒である。而して其處に一點の偽も無い。眞なるが爲に讀者はこれに對して極めて眞摯になる。幾多の道を見出し、幾多の教を得る。これをしも亂俗と云はゞ、源氏物語も亂俗であらう。否々、萬葉も古事記も亂俗と云はねばならぬ。眞を描いた文藝は人間界の寶である。その語を解し得る限りの人類これを讀み、子孫をして讀ましめ、永遠に傳ふべきである。眞は悲哀である。かるが故に西鶴の舞文、五彩陸離たる文字の裏に、氷の如き一道の氣あつて、人の心を刺す。西鶴を讀むことこれを反復せよ。必ず滂沱として涙の双頬に垂るゝ時があらう。是れこの氣に觸れたるの時である。この氣に觸るゝ時、眞に西鶴を解したのである。文の妖艶は唯是れ衣裳である、皮膚である。眞に西鶴を解したる時、吾人は斯翁に對して甚深甚大なる敬虔の念を動かし來る。

日本に斯人ありしかと驚き、且つ歡喜する。

さて其の皮膚たり衣裳たる彼が文章は頗る特色のあるもので、何人もこれに倣ふを容さぬものがある。西鶴は一面に俳諧師である。其の引締つた、文法を解脫した、内容に富んだ、印象的な文は、確に俳諧から發展したものである。西鶴を読むには西鶴獨特の表示法を呑み込まぬと解り難い。これは讀み馴れれば自らわかる。變な書き方だと感じて、直に西鶴の無學を思ひ、或は文字の誤だと推測するは不可、再讀三讀すれば自ら其の然らざるべからざる所以を會得するであらう。西鶴の、人間を寫し社會を寫す筆致は先づ感ぜられるが、彼が事を敘し來つて、卒然景を描き、描くと思ふ間に、知らぬ顔して事を敘し續く。この彼が描く背景の色彩の明るく鮮かなることを決して見落してはならぬ。

明治の小説壇は硯友社が拓いたと云つて宜い。その硯友社の中心は尾崎紅葉であつた。向島に淡島寒月と云ふ隱士あり、多く西鶴物を藏し、嘗て紅葉に會つた時、小説を書くなら西鶴物を讀まねばならぬ、と云つた。紅葉は寒月から西鶴物を借りて來て讀んだ。そして酔うた。爾來紅葉の筆艷彩を發した。紅葉の小説は西鶴に刺戟されて成つたものである。硯友社の多數はもとより之を學んだ。元祿の西鶴は遙に明治の小説壇を拓いたのである。大才の流風餘韻實に此の如きものがある。

次に本書に採録せる日本永代藏と本朝櫻陰比事について、簡単に解説する。

「日本永代藏」は貞享五年即ち元祿改元の歳の刊行で、西鶴時に四十七歳。所謂町人物として最初の作

で、全六卷。金を主題とした文學の嚆矢といふべきで、各卷五章の説話より成り、夫々具體的な説話によつて町人生活の實相を描寫し、面白可笑しく成功致富の要領を教へ、或は又倒産失敗に對する警戒を與へようとしてゐる。題簽の左下に「大福新長者教」とあるに見ても、本書執筆の態度に教訓的なものの存した事が知られるが、實際目睹せる世態を題材として、教訓癖の常套を脱し、奇想警句の續出せるを見る。本書の上梓されてより之に倣ふもの多く、浮世草子史上に重要な地位を占めてゐる。

「本朝櫻陰比事」は元祿二年の著。五卷。題の示す如く宋の桂萬榮の棠陰比事に倣つて、面白い裁判話を輯めたものである。皆京都の出來事で、皆「昔都の町に」と云ふ書出しである。昔とはいつてあるが、當時の話が多いのであらう。西鶴はこの人間社會に深く趣味をもつて、いろ／＼の材料を輯めた人である。既に裁判話である。艶彩あるべからざるものである。西鶴はよく書いた。清淡に書いて、そして十分の情味を持たせて居る。清淡の間に一寸挿む麗句に人を眩ずる光がある。惠まれた金紛失して死を決したる夫婦の情を描く所などはこの好き例である。嚴正に書き行く勢、時に走つて驚くべく強い筆になつて居る。若童に汚名をかけられたる後家の憤りを寫す所などはこの好き例である。八十歳以上の者の子は影がさゝぬ、古鼓の破革を黒焼にして飲ませると毒を飲ませた相手の名を呼ぶなどいふ珍しい迷信が所々に見えてゐるのも興がある。最後に能太夫の裁判を置いて、荒立つた舞臺を靜めて、目出度し／＼にしてある趣向も面白い。

以上の二部は共に原本によつた校訂し、假名は歴史的假名遣に改め、漢字の宛字は西鶴の常用せる特殊なもののみ之を存する事とした。

尙挿畫は原本よりその儘縮寫し、全部を木版に彫らせて挿入した。

日本永代藏目錄

卷一

一、初午は乗つて來る仕合

江戸にかくれなき俄分限
泉州水間寺利生の錢

二、二代目に破る扇の風

京にかくれなき始末男
壹歩拾うて家亂す忤子

三、浪風靜に神通丸

和泉にかくれなき商人
北濱に箒の神をまつる女

四、昔は掛算今は當座銀

江戸にかくれなき出見世
壹寸四方も商賣の種

五、世は欲の入札に仕合

南都にかくれなき松屋が跡式
後家は女の鑑となる者

卷二

一、世界の借家大將

京にかくれなき工夫者
餅搗も沙汰なしの宿

二、怪我の冬神
鳴

大津にかくれなき醬油屋
何をしても世を渡る此浦

三、才覺を笠に
着る大黒

江戸にかくれなき小倉持
身過の道急ぐ犬の黒焼

四、天狗は家名
の風車

紀伊國に隠れなき鯨えびす
横手ぶしの小哥の出所

五、舟人馬かた
鎧屋の庭

坂田にかくれなき亭主振
明くれば春なり長持の蓋

卷 三

一、煎じやう常
とは變る問藥

江戸にかくれなき箸削
小松榮えて材木屋

二、國に移して
風呂釜の大臣

豊後に隠れなきまねの長者
程なくはげる金箔の三の字

三、世は拔取の
觀音の眼

伏見にかくれなき後生嫌ひ
質種は菊屋が花ざかり

四、高野山借錢
塚の施主

大坂にかくれなき律義屋
三世相よりあらはるゝ猫

五、紙子身舂の
破れ時

駿河にかくれなき花菱の紋
無間の鐘を聞けば突き損ひ

卷 四

一、祈る印の神
の折敷

京にかくれなき桔梗染屋
薬人形の夢物がたり

二、心を疊み込
む古筆屏風

筑前にかくれなき舟持
蜘蛛の糸のかゝるためしも

三、仕合の種を
蒔錢

江戸にかくれなき千枚分銅
そなはりし人の身の程

四、茶の十徳も
一度に皆

越前にかくれなき市立
身は燃杭の小釜の下

五、伊勢海老の
高買

堺にかくれなき樋の口過
能は棧敷から見てこそ

卷五

一、廻り遠きは
時計細工

長崎にかくれなき思案者
火を喰ふ鳥も身をしりぬ

二、世渡りは淀
鯉のはたらき

山崎にうち出の小槌
水車は仕合を待つやら

三、大豆一粒の
光り堂

大和にかくれなき木綿屋
借錢の書置めづらし

四、朝の鹽籠夕
の油桶

常陸にかくれなき金分限
人はそれぐの願ひに叶ふ

五、三匁五分曙
のかね

作州にかくれなき悋氣姫
藏合といふは九つの藏持

卷六

一、銀のなる木
は門口の柵

越前にかくれなき年越屋

二、見立て、養ふしり武州にかくれなき一文もんよりの

子が利發りはつ

錢屋

三、買置かひ置きは世の

泉州せいしゅうにかくれなき小刀屋こがたなやの

心やすい時

藥代やくだい

四、身體しんたいかたま

る淀河よどがはの漆うるし

山城にかくれなき與三よきう右が
水車

五、智恵ちゑをはか

る八十八まじの升ます

今の都にかくれなき
三夫婦みつふとをいはふ

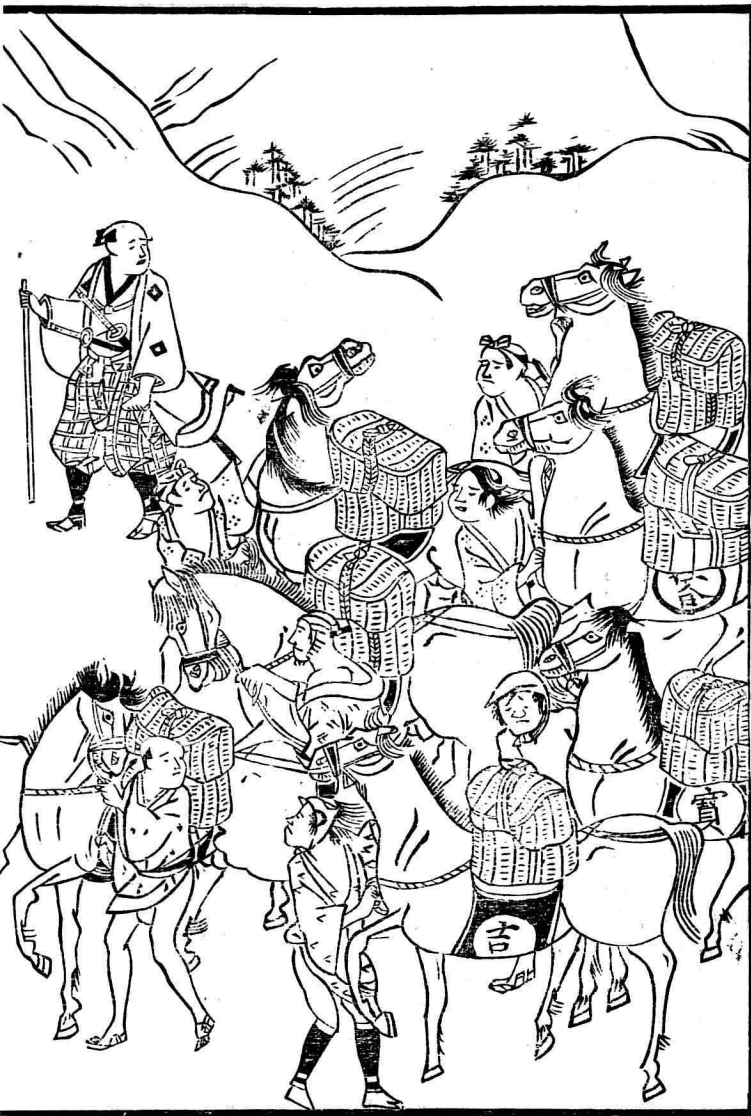
搔かき

日本永代藏 卷一

井原西鶴 著

一、初午は乗つてくる仕合

天道言はすして國土に恵みふかし。人は實あつて偽りおほし。其心は本虚にして物に應じて跡なし。是善惡の中に立つて直なる今の御ン代を、ゆたかにわたるは人の人たるが故に常の人にはあらず、一生一大事を過ぐるの業、士農工商の外出家神職に限らず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。是二親の外に命の親なり。人間長く見れば朝をしらず、短く思へば夕におどろく。されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ、金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立ちがたし。然りといへども残して子孫の爲とはなりぬ。ひそかに思ふに、世に有る程の願ひ何によらず、銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有り。それより外はなかりき。是にましたる寶船の有るべきや。見ぬ島の鬼の持ちし隠れ笠隠れ簑





も暴雨はあめやぐの役に立たねば、手遠き願ねがひを捨てて、近道ちかみちにそれ／＼の家職けしきをはげむべし。福德ふくとくは其身そのみの堅固けんこに有り。朝夕てうせき油斷あぶらぎりする事なかれ。殊更世ことごとの仁義じんぎを本もととして神佛しんぶつをまつるべし。是和國わにこくの風俗ふうそくなり。折をりふしは春はるの山二月初午さんにげつごの日、泉州くわんしゅうに立たせ給たまふ水間寺みづまでらの觀音くわんおんに貴賤男女きせんなんにょ參詣まうでける。皆信心しんじんにはあらず、欲よくの道みちづれ、はるかなる苔路こけち姫萩ひめはぎ萩はぎの燒原やけはらを踏ふみ分け、いまだ花はなもなき片里かたざとに來て、此佛このほとけに祈誓いのちかぎかけしは、其分際そのぶんざい程ほどに富めるを願ねがへり。此御本尊このごほんぞんの身みにしても、獨り／＼に返言へんごんし給たまふもつきず、今此娑婆しあはにつかみどりはなし。我頼われたのむまでもなく、土民どちやうは汝なんぢにそなはる。夫そとは田打あきうちちて婦ふは機織はたおりて、朝暮あさゆふ其そのいとなみすべし。一切さいの人ひと此このの如ごとくと戸帳とちやうごしにあらたなる御告ごこころなれども、諸人しよじんの耳みみに入いらざる事ことの淺あはまし。それ世よの中に借銀かりぎんの利足程りそくおそろしき物ものはなし。此御寺このみでらにて萬人まんじん借錢かりぜにする事あり。當年當年一錢いちせんあづかりて來年らいねん二錢にせんにして返し、百文もんうけと請取うけとり二百文にひゃくもんにて相濟あひたすましぬ。是觀音くわんおんの錢ぜになれば、いづれも失墜しつていなく返納へんなうし奉ほうる。おの／＼五錢ごせん三錢さんせん十錢じせんより内うちを借りけるに、茲ここに年の頃ころ廿三四にじさんしよの男產付おなまれつきふとくたくましく、風俗律義ふうそくりぎぎにあたまつき跡あとあがり、信長時代のぶながの仕立したて、着物袖下きるものそでしたせはしく裾すそまはり短く、上下うへしたとも共に紬つむぎの太織ふとりを無紋むもんの花はな色染いろぞめにして、同おなじ切きの半襟はんえりをかけて、上田綺うへだじまの羽織はおりに木綿きわたうらをつけて、中脇差ちゅうわきさしに柄袋つかざくろをはめて、世間よかんかまはず尻しりからげして、爰まゐに參りし印しるしの山椿やまつばきの枝えに、野老やろう入れし髭籠ひげこ取添とぞへへて下向げかうと見えしが御寶前ごほうぜんに立

寄りて借錢一貫と云ひけるに、寺役の法師貫差しながら相渡して、其國其名を尋ねもやらず、彼男行がた知れずなりにき。寺僧集りて、當山開闢より此かた、終に一貫の錢貸したる例なし。借る人ははじめなり。此錢濟むべき事とも思はれず。自今は大分に貸す事無用と沙汰し侍る。其人の住所は武藏江戸にして、小網町のすゑに、浦人の著きし舟問屋して次第に家榮えしを喜びて、掛硯に仕合丸と書付け、水間寺の錢を入置き、獵師の出船に仔細を語りて百文づつ貸しけるに、借りし人自然の福有りけると遠浦に聞傳へて、せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり、十三年目になりて元壹貫の錢八千百九十二貫にかさみ、東海道を通し馬につけ、送りて御寺に積み重ねければ、僧中横手打ちて、そののち詮議あつて、末の世の語り句にすべしと、都よりあまたの番匠をまねきて、寶塔を建立、有難き御利生なり。此商人内藏には常燈のひかり、其名は網屋とて武藏にかくれなし。惣じて親のゆづりをうけず、其身才覺にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりして是を分限といへり。千貫目のうへを長者とは云ふなり。此の銀の息よりは幾千萬歳樂と祝へり。

二、二代目に破る扇の風

人の家に有りたきは梅櫻松楓、それよりは金銀米錢ぞかし。庭山にまさりて庭藏の詠め、四季折々の買置、是ぞ喜見城の樂みと思ひ極めて、今の都に住みながら四條の橋を東へ渡らず、大宮通りより丹波口の西へゆかず、諸山の出家をよせず、諸牢人に近付かず、少しの風氣虫腹には自藥を用ひて、晝は家職を大事につとめ、夜は内を出ずして、若い時習ひ置きし小謡を、それも兩隣を憚りて、地聲にして我ひとりの慰みになしける。灯をうけて本見るにはあらず、覺えた通り世の費ひとつもせざりき。此男一生のうち、草履の鼻緒を踏みきらず。釘のかしらに袖をかけて破らず、萬に氣を付けて、其身一代に貳千貫目しこためて、行年八十八歳、世の人あやかり物とて升搔を切らせける。されば限り有る命、此親仁其年の時雨降る頃、憂の雲立ち所をまたず、頓死の枕に、残る男子一人して此跡を丸どりにして、廿一歳より生れ付きたる長者なり。此世倅、親にまきりて始末を第一にして、あまたの親類に所務わけとて箸片し散らさず。七日の仕揚、八日目より部門口を開けて、世をわたる業を大事にかけて、腹のへるを悲みて、火事の見舞にも早くは歩まず、支配穿鑿に年暮れて、明くれば去年のけふぞ、親仁の祥月とて、旦那寺に参りて、下向に猶昔を思ひ出して泪は袖にあまれる。此手紬の碁盤縞は命しらすとて親仁の着られしが、思へば惜しき命、今廿二年生き給へば、長百なり。若死あそばして大ぶん損かなと、是にまで